



法華宗

No.134

発行 法華宗宗務院

法華宗ホームページ

www.hokkeshu.or.jp/

信報

皆様に役立つ情報をお届けします



「命の尊厳」

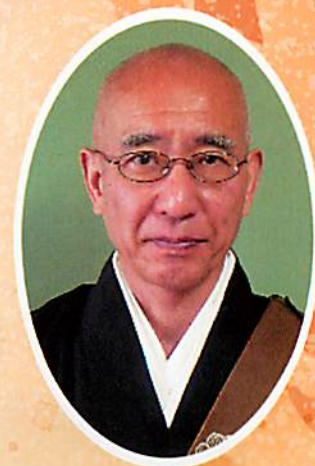


宗祖の御教え

法華宗教学研究所長

大平 宏龍

《法華経・日蓮聖人のありがたさ》



問うて云く、末代悪世の凡夫は何物を以て本尊と定むべきや。
答えて云く、法華経の題目を以て本尊とすべし。

『本尊問答抄』（日興写本、定遺一五七三頁）

私達が、生死の人生の支えとすべきものは南無妙法蓮華経であることを述べられた御文章です。

せを、私は思わずにはいられます。その日蓮大士の御教えが、日蓮聖人によって正しくいただけることも忘れてはなりません。

紙面に限りがありますから、一例を申し上げます。

よう。この世に生を受けて、やがてまた此の世を去らねばならない私達が、どのように生き、どのように死を超えるか、その支えとなるものが「ご本尊」です。

これを南無妙法蓮華経で

あると、正しく拝んでいるのは日蓮聖人門下の中

も私達「法華宗」だけとい

ってよいでしょう。仏教の

特色はこの世の真理・従う

べき道（ダルマ。法と訳す）

に従って生きぬくことで

す。梵語で南無とは「敬う

こと。従うこと。」故に南無

法が仏教の基本であり、蓮

華に象徴される最も根本

のあり方が、南無妙法蓮華

経に生きることです。

健康であることは、身

るのです。

体が正法の状態であるこ

とです。だから人々が健

康の為にウォーキングな

どすることは正法の実践

（立正）です。「正法」をす

べての人々の幸せの為に

という次元で、時の幕府

に提起されたのが、宗祖

の『立正安国論』でした。

現在は、いろいろな所で

「立正」が求められてお

り、「立正安国」はまさに

現在・未来の問題といえ

るのです。

さて、世間ではまだま

だ日蓮聖人についての無

知や誤解が多いのは残念

なことです。その意味で

朗報があります。法華宗

法昌寺住職の福島泰樹上

人が、『大法輪』誌上で、

「日蓮紀行」の連載を始

められたことです。日蓮

聖人ゆかりの地を、福島

上人と共に旅しながら、

聖人の理解者の一人でも

多くなることを希うのは

私だけでしょうか。

2 「宗祖の御教え」

法華宗教学研究所長 大平 宏龍

3 現代に生きている教学

興隆学林助教授 石田 智宏

4 法華宗教学研究所紹介

6 聖応山 妙感寺

千葉 茂原市 妙感寺 田中 庸雄

7 大沼田檀林

千葉 東金市 妙経寺 渡辺 明博

8 写経会

教化センター報

表紙写真

ある年の正月、まだ歩けるようになって間もないと思われる男の子がお父さんとお母さんと一緒に歩いていました。手にはみかんを握りしめ、嬉しそうにしているお子さんをご両親は微笑ましく見ていました。『こんにちば』と挨拶すると、まだしゃべれそうになかった男の子は、私にみかんをくれようとしてきました。何とも言えない、とても嬉しくて、愛おしい気持ちになったのを思い出しました。

写真家 小高 雅也

正月をもてなす

「もてなす」とは大切に
する、という意味である。
古来どの家でも新年を迎
えるときには、注連縄を飾
り、おせち料理を整えて、
何かしら特別な、あらたま
った空気が流れていた。生
活が多様化した現代では、
そのように準備して新年

を迎える人は稀少の部類
に入るかもしれない。それ
でもなお、「あけましてお
めでと〜う」という挨拶は生
きている。日本人は数え歳
の習慣をほとんど捨てて
しまったが、この挨拶に
は、いろいろあった一年を
送り、年が明けて一つ歳を
重ねたからめでたい、とい
う考え方が含まれている。
しかしわがまま勝手に毎

日を過ごし、ただ歳を重ね
て本当にめでたいと言え
るだろうか。そこで冒頭の
言葉が生きてくる。
「正月の一日をもてなす
人は、徳がすぐれ人に愛さ
れる人である。」(重須殿女
房御返事)とは日蓮聖人の
お言葉だが、人に愛される
人は人を愛する人である。
お題目の功德にあずかっ
ている人ならば、さらにそ

の功德を積んでこそ、歳を
加えることがめでたいの
である。

正月の過ごし方は人
によってまちまちだろ
う。大晦日まで仕事に追
われる人には、やっとし
ばらく解放されて、家族
とともに過ごす特別な
ひとときとなる。年末に
年賀状を書けなかった
人は正月休みに旧友を
思って年賀状を書く。こ
の時が書き入れ時の人
もいれば、新年をホテル
や温泉で、また海外で過
ごす人も少なくない。私
の友人には、カウントダ
ウンはいつも機上とい
う人がいる。家族の元へ
帰るのに、都合でどうし
てもそうになってしまう

のだ。しかしどこにいて
どのような過ごし方を
するにせよ、正月をただ
の休日ではなく、あらた
まった気持ちで迎える
ことに価値がある。

隋唐時代の中国では、
正月は蔬斎・持戒し経を
読む月とされた(四時纂
要)。社会全体が殺生・肉
食をやめ、戒を守ったの
だ。今のわれわれにとっ
て持戒とは法華経をた
もつこと、すなわちお題
目を心において生きる
こと。正月はそのことを
改めて意識する時であ
る。今年は、あるいは今
年も、どこにいても、何
をしていても、正月を大
切に過ごすことにした
いものである。

現代に生きている教学

興隆学林助教授

石田 智宏



法華宗教学研究研究所紹介

教義なくして宗門の生命はありえない

荻谷日任師『桂林学叢』創刊号序文より

法華宗教学研究研究所は、昭和二十四年に設立された「法華宗桂林同学会」が前身であり、昭和三十三年に現研究所となりました。当初からは実に六十一年の伝統を有する研究機関です。

また総会では、研究発表の他に「討議会」が開かれます。ここではテーマを一つ選定し、担当者数名がパネラーとなって問題提起をした上で、全員参加による熱い討議が展開されています。ちなみに近年取り上げられたテーマには、「憲法第九条を考える」（平成二十年度）、「『立正安国論』をめぐる問題」（平成二十一年度）、「臓器移植について（脳死について）」（平成二十二年度）など、その内容は教学のみに留まらず、今日社会的に問題となっている事柄を取り上げるなど、多岐にわたっています。もちろん、こうした問題を討議する際に最も重視されることは、現代社会に起きている様々な問題を法華宗教義との関連でどう捉えるべきなのかということであり、まさにこうした点こそが法華宗教学研究の大きな特徴の一つであると言えるでしょう。

当研究所は文字通り法華宗の教学について研究する組織であり、所長以下、所員・研究員・研究生をあわせて、現在総勢二十五名によって構成されています。それらの研究所メンバーは、仏教学部・宗史部・宗学部・文化部の各部に所属し、各自の研究領域において研鑽を深め、一年に一回開催される「総会」において自身の一年間の研究成果を発表することに

なっています。

した問題を討議する際に最も重視されることは、現代社会に起きている様々な問題を法華宗教義との関連でどう捉えるべきなのかということであり、まさにこうした点こそが法華宗教学研究の大きな特徴の一つであると言えるでしょう。

持、広報に貢献し続ける教学研究の活動の記録として重要な意義を持ち続けています。また近年では、各自の努力もあって一年に一回の発行が実現しており、宗内のみならず宗外の研究者からも注目を集めるに

さらに、各自の研究成果を発表する場として、『桂林学叢』が刊行されています。『桂林学叢』は昭和三十五年に創刊された機関誌で、現在二十一年号（平成二十一年）を数え、これまで教学研究の活動を支えてきた多くの諸師の貴重な論文の宝庫として、また日蓮大聖人の正統である真正宗義の継続的維

持、広報に貢献し続ける教学研究の活動の記録として重要な意義を持ち続けています。また近年では、各自の努力もあって一年に一回の発行が実現しており、宗内のみならず宗外の研究者からも注目を集めるに



至っています。

討議会についても、資料をまとめたパンフレットを作成して宗内に配布するなど、その成果を宗門に少しでも還元できるように、情報の発信に努めています。

言うまでもなく、法華宗は、昭和十二年の「法華宗教義綱要事件」、同十六年四月から二十年十月に至る「曼荼羅国神不敬事件」、同十七年の「宗祖御遺文



削除事件」等、一連の国家権力による仏教団弾圧事件に屈せず、一貫して宗祖日蓮大聖人の正義を貫きその壊滅の危機を乗り越えてきた唯一の宗門です。戦後、こうした伝統を受け、さらに教学の発展を願って、学究の僧を集めて設立されたのが当研究所の前身である「桂林同学会」でした。

荻谷日任上人(当時の興隆学林長)は『桂林学叢』創刊号(昭和三十五年)に寄せた序文の冒頭において、次のように述べておられます。

宗門の命脈は云うまでもなく教義である。教義なくして宗門の生命はあり得ない。如何に多くの道俗を有し教団の組織が大であり、また行政上に万全を期しても、その根本生命たる直正な教義を伝持しこれを弘通しなければ正法は

廃頽し、延いては大衆をして悪道に墮せしめる大謗法となることは明らかである。

すなわち、真正な教義の伝持弘通こそが、大衆を悪道に墮せしめないために重要であるということです。

また、次のようにも仰っています。

桂林同学会は本宗再興唱導師日隆聖人が数百巻の大著に亘って疏述せられた指南によつて、宗祖大聖人の真正宗義に対する精確な研究と其の組織を計り、以つて内には宗脈の相続を、外には宗義の闡揚を期するものである。

まさにこの一文こそが、法華宗教学研究の基本理念であると言えます。すなわち、宗祖日蓮大聖人の示された正しい教義について、日隆聖人の御指

南によって精確に研究し、宗教学・宗学・宗門史・仏教文化など、多方面にわたる各々の研究を組織化して、さらにそれを宗門の内外に発信して行く。これが当研究所の役割であり使命なのです。

株橋日涌上人(当時の所長)は『桂林学叢』第十号の序文で、宗学の向上は宗勢の発展であり、宗学の頹廃は宗勢の低下である。

と述べられています。この与えられた使命を全うすべく、法華宗教学研究は日々努力を重ねております。今後もさらなるご理解ご支援をよろしくお願い致します。

聖応山 妙感寺

一、創立 寛永五年日善聖人(大本山本能寺・本興寺両山二十世)
一、開基 大本山本能寺四十五世日行聖人 始祖 守玄院日治上人

千葉 茂原市 妙感寺

田中 庸雄



本寺の境内には、四季折々の花が咲き、花見ながらの参詣者が多く訪れる。



由緒・縁起

世は、戦国時代の終期、河野権左工門(生国不詳)を頭とする一族郎徒が上総国長柄郡千町野新田(現、茂原市六ツ野千町)に入植し、開拓を始めた。その一団の中に京都本能寺

に僧籍をおく僧侶がおり、やがて生活が安定し、小さな庵(本妙坊)を建て修行しながら近郷に布教することとなる。

ときに、前記の六ツ野という所は、当時は広大な荒地であり、ススキや低木が生い茂り、湿地にはヨシやアシが生え、小動物が住み、大変な土地であった。

江戸時代、徳川家康がこの地で鷹狩りをし、今でも御成街道が残っていることからして、いかに広大な原野であるかがわかる。

さて、時を経て、享保十四年(二七二九)には、前記本妙坊を長松寺と改称(寺記)し、本堂を再建し、境内整備を行う。

かたや、寛永五年(一六二八)、京都一乗寺村に日善聖人(大本山本能寺・本興寺両山二

十世)により、聖応山妙感寺が創立され、元文元年(一七三六)、請願により、聖応山妙感寺の寺号を先の上総国長松寺に移して、大本山本能寺・本興寺の両山末寺(寺記)となる。

次いで、宝暦二年(一七五二)には、本堂を建立、(大本山本能寺五十世日寛聖人・本興寺四十八世日憲聖人による棟札御本尊在り)諸伽藍の整備をし、法華経布教の教線拡張を図った。

やがて、幕末を経て明治三十六年(一九〇三)、大本山光長寺五十四世日利聖人と大本山鷲山寺八十世日和聖人の仲介により、京都亀岡にある鷲山寺末寺本門寺と両山末寺の妙感寺とを末寺交換されることとなり、現在に至っている。



大沼田檀林

千葉県内の檀林

江戸時代初期に、千葉県内には日蓮門下でも多くの檀林(僧侶の養成機関)が開設されました。一致派

は、飯高檀林(八日市場市飯高・飯高寺)・小西檀林(大網白里町小西・正法寺)・中村檀林(香取郡多古町・日本寺)・松崎檀林(香取郡多古町東松崎・顕実寺)・玉造檀林(香取郡多古町南玉造・蓮華寺)・野呂檀林(千葉市野呂・長崇山妙興寺)が設置され、殊に飯高・小西・中村檀林は「関東三大檀林」と称され繁栄したと伝えられています。



勝劣派では、大沼田檀林(東金市大沼田・妙経寺)・細草檀林(跡地は現在白里中学校が建つ)・宮谷檀林(大網白里町宮谷・本國寺)が設置されました。

大沼田檀林旧跡 法輪山妙経寺

ここでは大沼田檀林のあった妙経寺を紹介します。

妙経寺は正中二年(一二三五)

茂原市鷲巢大本山鷲山寺御開山日弁大正師の高弟である蓮秀日壽聖人の開山です。文禄三年(一五九四)鷲山寺第十世日進聖人が上総田間村(東金市田間長久寺)にあつた学問所を大沼田妙経寺境内に移



境内に移

転せしめたことが当檀林の起源です。

元和八年(一六二二)徳川秀忠が鷹狩の際、大沼田へ立寄り、境内東西七十間、南北百二十間が御朱印地となりました。寛永六年(一六二九)大本山第十三世日乾聖人(大沼田檀林中興開基)は檀林を勝劣派の常談所と定め、学徒四方より集まり隆盛を極めたようです。

寺内に恵正院、寛照坊、大仙坊の三院坊の他、乾師堂、八幡宮、鬼子母神堂等の諸堂があり、檀林施設として講堂・本院・柳寮・側坊その他、所化寮三十六軒を有していたと伝えられています。

明治初年に至り学徒数減少し、明治七年(一八七四)本堂と共有していた講堂を妙経寺に譲渡し、正法法華の修学道場と



千葉県東金市 妙経寺

渡辺 明博

して栄えた大沼田檀林もここに終焉をむかえました。

平成二十二年に大本山鷲山寺御開山日弁大正師第七百遠忌報恩事業として寺檀相図り本堂大改修が実施されました。

江戸時代幕府によって、寺社に下付された寺社領のこと。証文地ともいう。



写経会

教化センター主催「第一回写経会」が開催されました

教化センターでは平成二

十年に『写経御手本集』を

作成発行して以来、全国の

寺院教会や檀信徒の皆様

から好評をいただいています。

また、多くの方々から「写

経会」を開いて欲しいとの

要望がありましたので、今

回教化センター主催による

「第一回写経会」が、残暑厳

しい八月三十日、東京人形



町・法華宗宗務院を会場として開催されました。

写経は、法華経に説かれて

いる「五種法師」つまり

受持…法華経を信仰し、

持つて日々の生活

を送ること

読…法華経を見て経

文を読むこと

誦…法華経を暗記し

て読むこと

解説…法華経を理解し、

他の人に説くこと

書写…法華経を書き写

すこと

の五種類の修行方法の一つで、この書写行にあたりま

す。心静かに、釈尊の真のお

言葉である法華経を一文字

一文字拝写させていただく

ことは、信心が増進すると

共に、私たち法華信徒にと

つて、唱題・読経に次ぐ大切

な修行です。

当日は、東京・千葉・東海の

三教区内より住職担任寺院

婦人・檀信徒、そして一般の

方々十三名が集まりくだ

さり、午後一時より法味言

上、その後センター所員であ

る中村妙心師による講義、写

経実践、センター所長の挨拶

があり、午後三時に閉会とな

りました。講義では、(1)写経の

心得 (2)写経の歴史 (3)筆の

持ち方 (4)腕の構え方(5)誤り

の処理法 (6)構成

といった写経の基礎について

の説明が約四十分間あり、そ

の後約一時間にわたり写経

を実践し、受講生の方々は一筆一心に集中されながら写経をされていました。

今回は関東三教区を中心

に開催された「写経会」でし

たが、ご希望があれば日本全

国各地でこの「写経会」を開

催したいと思います。そして

一人でも多くの方に身近な

所で写経を体験してもらい、

より一層の信力増進に励んで

いただきたいと願っています。

(教化センター報)

法華宗ホームページ



法華宗本門流

検索

www.hokkeshu.or.jp/

たくさんのアクセスお待ちしております

編集
後記

早いもので、信報編集に携わり3年の月日が流れました。多くの御意見や叱咤激励を戴きました。達成感より遣り残しの反省をしております。いま何ができるのか、何をしなければいけないのかと、優先順位を決めて追われる日々。今年はどのような年に!全ては自分自身の行い次第です。ありがとうございました。

編集長 佐藤 正純

法華宗信報

No.134

平成23年1月1日発行 発行人/二瓶 海照 編集人/佐藤 正純

編集部/〒299-4341 千葉県長生郡長生村宮成373-1 清泰寺内 TEL.0475-32-0402

発行所/〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町2-19-1 法華宗宗務院 TEL.03-5614-3055

印刷所/株式会社マックス